
死神の囁き・表

FrangBeat

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神の囁き・表

【Nコード】

N0286Z

【作者名】

FrangBeat

【あらすじ】

一組のカップルが誕生。

それにより世界の運命が大きく変わろうとしていた。
変わった世界と、変わらなかった世界。
表と裏で違う世界が楽しめます。

く始まりく（前書き）

初心者なので読みづらい箇所があります。ご了承ください。

く始まりく

「う、うん……」

「あ、ありがとう……／＼」

この日、一組のカップルが誕生した。

それは物語の幕が今開いたことを意味する。

このカップルが誕生しなければ世界の運命は違ったものになっただろう。

別に二人は友達というわけでもなく、話している姿も見受けられなかった。

二人はそれぞれ別の友達とつるんでいた。

路線が徐々に最悪な方向へ向かっていったのは丁度期末試験を翌々日に控えたその日だった。

「あ、あの……さ、桜川さん……」

この気弱な青年は讓皇牙（ゆずりおうが）。

「はい？あ、皇牙君……」

少し恥ずかしがり屋なところがあるのが桜川結城（さくらがわゆうき）。

「この問題を少し、教えてほしいんだけど……」

と、皇牙が数学の問題集を結城の前に。

結城は容姿端麗。成績優秀。学校中の注目だった。

一方の皇牙は特に目立つこともなく、学校生活を送ってきた。

「ああ、この問題は……」

と結城はわかりやすく説明した。

「あ、ありがとうございます。」
「いえ。」

二人の会話はそれで終了。
・・・かと思った。

次の日になり・・・

学校に来てみると、結城と皇牙が仲良く話している。
そんな姿を見ていたクラスの人たちはもちろん吃驚。

昨日のことがきっかけで話すようになったのか。・・・ちっ

話はHRでのクラスに移る。

「今度さ、肝試しやるけど参加するやついるか？」
クラスのリーダー的な存在がみんなに聞いてきた。

もちろんみんなは「マジ!?!」「行く行く!!」と騒いでいる。
「じゃあ、これから男女一組でペア組んでもらいます!!!」
・どうせ誰も僕とは組んでくれないから行かなくていいや・
そう思っていた皇牙。
すると。

「お、皇牙君・・・あたしと一緒に回りませんか・・・?」

結城が声をかけてくれた。

「あ、はい・・・ぜ、ぜひ・・・」

即答だった。

迷う余地などない。

- 僕と回ってくれるとか、桜川さん優しいな・・・だからみんなに好かれるんだな・・・
-
そう思っていた。

- HRが終わり、放課後 -

「桜川さん・・・あの・・・ありがとうございます・・・」

「え？何がですか？？」

「肝試し・・・僕なんかと回ってくれて・・・」

「あ、いえ・・・どういたしまして」

「あ、でも・・・あたし・・・優しくなんかないですよ？？」

- え？それってさっきの・・・声に出てたかな・・・?? -

「誰にでもつてわけでもないですし・・・」

・・・しばらくの沈黙。

破ったのは結城だった。

「あ、あの！！あたし・・・実は・・・」

キンコーンカーンコーン

結城が何かを言いかけたところで下校時刻を知らせるチャイムが鳴った。

「あ・・・チャイム・・・」

「もうこんな時間だったんだ・・・桜川さん・・・何か言いかけました・・・??」

「あ、いえ！！・・・帰りましょう・・・？」

「は、はい・・・」

帰り道。二人は住んでいるところが近かったため、一緒の電車に乗った。

しかし・・・

「・・・」

「・・・」

・・・無言。

どちらも勇気が出せずに結局、沈黙のまま二人は別れた。

結城は一瞬ふつと暗い影を感じた。

同じとき、皇牙も暗い影を感じた。

それは気のせいではなく、その後の二人の人生に影響するものだった。

そんなこと・・・今の二人は知るはずがない。知られては困るのだ。

く序章く

「あれ??? いったい何だったのだろう・・・」

気づいたら駅長室に寝ていた。

「お、きづいたか。」

優しい笑顔の駅長さんがいた。

「・・・ありがとうございます・・・」

駅長さんの話によれば突然に倒れたらしく、駅長に声をかけてくれた人がいたらしい。

お礼が言おうとしたが、その人は俺が目覚める30分前に帰って行ったらしい。

「一瞬黒い影を感じたような・・・」

「立てるかいい?」

駅長さんは手を差し伸べてくれた。

「は、はい・・・ご迷惑をおかけしました・・・」

皇牙は駅長さんの手を借り、足早に駅長室を後にした。

気づけばもう19時。結城と学校を出て、この駅に着いたのが17

時頃。

つまりは2時間も気を失っていた。ということになる。

- 何だったんだろう・・・気のせいだよな・・・ -

皇牙は駅から出て、家路についた。

家に帰っても誰もいない。

父：讓甲牙（ゆずりこうが）

母：讓優雅（ゆずりみやび）

二人は皇牙が中3の時に海外出張先で死んだ。

夢の中には今でも父と母の「助けてくれ・・・皇牙・・・」という声が聞こえてくる。

毎晩毎晩その悪夢にうなされていた。

両親の死亡があつてから皇牙はたった一人で生きてきた。

幸いにも両親が残してくれた、貯金が大量にあつたために嘆くほどでもなかった。

しかし・・・両親を失うだけでなく皇牙は「嬉しい」という感情だけがなくなってしまうた。

「ありがとう」とは言うものの本心からではなく単なる上っ面。言わなければ後で面倒なことになる。

かつての皇牙はクラスのリーダー的存在だったが、両親の死とともにその性格は一変。

もちろん周りにいた友達も減っていく。今では家でも学校でも独り。そんな俺に声をかけてくれた、桜川結城。

この人にだけは本当に感謝の気持ちを伝えることができると思った。

「ただいま……」

家の中は静寂に包まれていた。カーテンも閉め切り、電気もつけずに生活をしていた。

学校以外で誰かに会いたくない。買い物に行くときも必ず誰かと顔を合わせないようにフードをかぶったりしていた。

そんな皇牙の夕飯は自炊。皇牙は唯一”料理”を武器にしていた。食べさせる人はいなくても、必ず父と母の分は作るようにしていた。

今日も自炊。簡単に炒飯を作った。もちろん3人分。

「いただきます……」

一口、また一口と口に運ばれていく炒飯。

・ 一人で食べてる姿……桜川さんが知ったらどう思つのかな……
・

フツ……

再びあの感覚。影だ。

皇牙はその場に倒れた。

「いてててて……」

・ またか……やっぱり気のせいじゃないのか……

フツ・・・

皇牙に來た同時刻、結城にも同じ現象がおきていた。

「いたあゝ・・・・・・・・」

・またあの時の感覚・・・何なんだろう・・・

「皇牙君・・・」

気づけば皇牙の名を口にしていた。

そういえば、結城はあの時電車のなかで倒れた。

後から言われて知ったことだが、倒れている間中「皇牙君・・・」と何度も言っていたことを知り顔から火が出る思いだった。

・次の日・

・また学校だ・・・憂鬱だな・・・

今日も学校だった。登校中、あの正体不明の影が来ることはなかった。

しかし・・・

ガタン！！！！

皇牙と結城が同時に倒れた。教室内で。

二人はすぐに保健室へ。

ほぼ同時に起きると・・・

「いてててて・・・」
「いたあゝ・・・」

「またかゝ・・・」

「え??」

二人同時にキョトンとした顔になってしまった。

「ためしに聞いてみようかな・・・」

「またって・・・何が??」

沈黙の中、皇牙が切り出した。

「あ、えっと・・・変なこと言ってるって思われるかもだけど・・・
・なんか最近・・・黒い影が突然来るの・・・そうしたら倒れたり
して・・・」

「え・・・??桜川さんも??」

「”も”ってことは皇牙君も??」

「う・・・うん・・・」

二人はここで初めて知った。同じ現象が起きていたこと。それが同時に起きていたこと。

「まさか・・・桜川さんもだったなんて・・・」

「あたしも皇牙君も倒れてたなんて、気づかなかった・・・」

「ね・・・ねえ・・・」

「ん・・・？」

「これから二人でこの影のことを調べたりしない・・・？？」

そついいしたのは皇牙だった。

「う・・・うん・・・怖いしね・・・」

結城も乗った。

二人はここに二人だけの組織「SHADOW RESEARCHER
S」を結成した。

「ちつ。まずいな。まあいいか・・・相当な時間がかかるだろうし
な・・・。見ているぞ・・・常にな・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0286z/>

死神の囁き・表

2011年12月1日16時52分発行